

# 大名みえ子です

ご相談はお気軽にお寄せください

〒319-1112

東海村村松2401-2

oona\_toukai@yahoo.co.jp

3月議会一般質問から

## JCO臨界事故から10年、住民の安全願って何を考えるか

村長の答弁を数回にわけてご報告します



村長： 私は、臨界事故の背景に当時の原子力界の状況があったと思っている。1つには安全神話があったこと。2つには日本人が技術に対する過信があったこと。3つには法体系もいわゆる組織体制もできていなかったことなど。当時、私が村長になったころは「原子力は絶対安全だ」と言われ、原子力防災訓練も「安全なんだから必要ない」ということも耳にした。

私が村長になる以前、本村での旧動燃の火災爆発事故、その前には「もんじゅ」の事故があり、PA活動つまり「安全」が強調され推進された。しかし、原子力はまさに人間が作り出してきた科学であり技術である。特に自然界の最少単位である原子の中、原子核にまで手をいれ作り出してきたという極めて人間性に富んだ、人間味のある科学である。そして当然ながらこれは人間が制御していかなければならないということを痛切に感じさせられたわけである。

平成12年度版の原子力安全白書には、当時の原子力安全委員会が事故後、臨界事故を振り返り、なぜ安全神話がつくられたのかという考察が記されている。要因としては、1点は他の分野に比べて高い安全性を求める設計への過剰な信頼、2点目は長期間にわたり人命にかかわる事故が発生しなかった安全実績に対する過信、3点目は過去の事故経験の風化、4点目は原子力施設立地促進のPA活動への偏重、5点目は絶対的安全への願望があげられており、「この点は原子力界としても反省しなければならない」と記されている。

その後も事故やトラブルが続発し、臨界事故の経験が生かされていないんじゃないかとのご質問ですが、私は、日本人は高度な科学技術を手にすることはできるかもしれないが、それをコントロールする社会的なシステムをつくる能力に欠ける民族ではないかと思ってきた。コントロールするための技術開発、組織体制整備の必要性から原子力災害対策特別措置法、原子炉等規制法の改正、損害賠償法の改定について強調してきたがこの部分ではかなり改善された。

そして原子力安全・保安院の新設及び原子力安全委員会の事務局機能の強化が行われたが、あれだけの短期間で、それだけのことがされたということは、まさに原子力に対しての過信があったということの証左でもあるかと思っている。（続きは次号で）



志位委員長  
8日、水戸市

### 北朝鮮に核兵器開発を終わらせる

#### この最も重要な目的達成のための外交努力こそ

日本共産党の志位委員長は、8日、水戸市内での演説の冒頭、北朝鮮のロケット発射問題に触れ、「今後の対応で大切なのは第一に、北朝鮮による核兵器開発を終わらせること。第二に、そうした努力をつくさないままのやみくもな制裁強化論、ましてや軍事対応論は外交的解決をはかるうえでの障害以外の何ものでもない。さらに有害なのは軍事対応論。共同通信配信の『“強気発言”より外交努力を』と題して、「ミサイルを発射させない」ために、外交努力をぎりぎりまで尽くすことが政府の使命だろう。首相が、やるならやってみると言わんばかりの姿勢をとるのは、突出しすぎだ...。」との「論説」に共感を示しました。（概要）